

関西学院大学 研究成果報告

2018年 5 月 16 日

関西学院大学 学長殿

所属：文学部
職名：教授
氏名：大橋毅彦

以下のとおり、報告いたします。

| | |
|--------|---|
| 研究制度 | <input checked="" type="checkbox"/> 特別研究期間 <input type="checkbox"/> 自由研究期間 <input type="checkbox"/> 大学共同研究 <input type="checkbox"/> 個人特別研究費 <input type="checkbox"/> 博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。 |
| 研究課題 | 租界都市上海をめぐる多言語多文化横断的研究 |
| 研究実施場所 | 自宅・個人研究室 |
| 研究期間 | 2017年4月1日 ～ 2018年3月31日 (12ヶ月) |

◆ 研究成果概要 (2,500字程度)

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

- 2017年3月に上梓した拙著『昭和文学の上海体験』（勉誠出版）の内容を発展・深化させることを目標にして、以下の調査研究を実施した。
- (1) 戦時中国で刊行されていた雑誌メディアの調査と掲載記事細目作成。具体的には上海で刊行されていた日本語総合月刊誌「大陸往来」の1943年度分の調査を行い、その成果を「日本文藝研究」誌上に発表。次いで同誌の1944年度分、ならびに南京で刊行されていた「黄鳥」に関しての調査もを行い、それらの細目作成もすでに済んでいる。如上の細目は、同様の作業を進めている関西在住の日本近代文学研究者の成果と合わせて、2018年度中に三人社（京都）から『戦前・戦中中国関係文芸雑誌細目』として刊行する予定である。
- (2) 『昭和文学の上海体験』において、いわゆる「文学史の陥没点」を埋めるために注目してきた文学者、芸術家の中で、室伏クララと村尾絢子に関する調査研究を推し進めた。室伏クララについては、今回の研究期間中に畏友の秦剛（中国・北京外国語大学、北京日本学研究中心教授）が発見した雑誌「大陸」に掲載されているクララの翻訳作品も活用、村尾絢子についてはニューヨークのメトロポリタン美術館で彼女と20年来の付き合いを持った同美術館名誉館員梶谷宣子氏からの情報提供によって知り得たことどもを整理して、この二人の「マドモアゼル・M」の上海時代がいかなるものであったかを考察し、その成果を「早稲田文学」に発表した。

- (3) 1920年代から30年代において、上海との間にさまざまなかたちで文化的通路を持っていた神戸に着眼した調査研究にも力を注いだ。元町鯉川筋に1930年に開廊した「神戸画廊」や、小田実の長篇小説「河」などは、いわゆる神戸モダニズムの再検討を迫ってくる対象であるとともに、神戸と上海との関りを同時代の東アジア全域の歴史の中で考察するとば口ともなる対象である。兵庫県立美術館や「小田実を読む会」との連携も深めながら、日本近代文学会関西支部の連続企画「〈異〉なる関西—1920、30年代を中心として—」で報告を行うとともに、「神戸画廊」の機関誌に関する調査研究の成果を活字化した。さらに、上海と神戸との文化的結節点とも呼ぶべき事象の一つとして、1950年に神戸西宮で開催されたアメリカ博覧会の中で催された「グランド・バレエ」の上演があることを発見、竹中郁、小磯良平、小牧正英、吉原治良、服部良一らの協同の意味を探るための資料収集にとりかかった。
- (4) 亡命ユダヤ人美術家ダーフィド・ルドヴィヒ・ブロッホの芸術活動についての研究—とりわけブロッホの評伝執筆に関する成果概要—については、「個人特別研究」の成果報告書の方を参看されたい。内容の重複を省くため、ここでは主として、この芸術家の活動の意義について、国内外において機会あるごとにその発信に努めたことを記しておく。すなわち、吉林大学で開催された国際シンポジウム、立命館大言語文化研究所の連続講座での講演や、神奈川大学の「良友」画報研究会の公開研究会「上海租界と外国人社会」でのコメンテーターとしての発言を通して、戦争とホロコーストの時代を生き抜いたこのユダヤ人芸術家の生の足跡を探索し続けてきた。

以上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内 博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。